

バカにつける薬

windcreator

店先にて

「すみません」

「いらっしゃいませ。何かお探しでしょうか？」

「外の看板を見たのですが……」

「ああ、外の看板を。お客様は、＜バカにつける薬＞をお求めですか？」

お母さんのお悩みは……？

「いえ、その、わたくし息子の成績が心配でして、それで、その……」

「息子さんのためにとは、お母さん、親の鏡ですね！」

「いいえ、いいえ。わたくしの息子ときたら、家では一切勉強せず、昼にはお昼寝。食べて遊んで寝て、その繰り返しでぐうたらと毎日を過ごすばかりで、まったくお恥ずかしい限りでして……」

「お母さん、ご安心ください。我が店の自慢の一品である〈バカにつける薬〉で、息子さんは見違えるようになります！」

そう、バカにつける薬ならね！

「ほ、本当ですか？ 本当にわたくしのおバカな息子でも東大に受かるようになりますか？ 一流の商社に入れますか？ 立派な大人になれますか？」

「ええ、ご安心ください。すべて問題ありません」

「ああ、本当に本当なんですか？ 今まで、どこの病院にいても誰も真面目に取り組ってくれなかったの！ 本当にもう、あの子は立ち直ってまっとうな人生を送ることが出来るんですか！？」

「はい、その通りです。お母さん、今まで苦労なさってきたんですね。もう、これからはそんな苦労は必要ありません。今から息子さんに連れて行ってもらいたい観光地を探しておくといいでしょう」

「ああ、本当なんですね、ありがとうございます。ありがとう……」

「ええ、では早速いまから処方いたします。息子さんの年令と体重をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

バカにつける薬

「はい。一歳でちょうど6000グラムです」

「なるほど、よく分かりました。今処方しますので、少々お待ちください」

お買い上げありがとうございました。お大事に

♪ ♪ ♪

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

「……………店長、今のお客さんちょっとおかしくはないですか？」

「いや、薬を処方したから大丈夫だよ」

「まさか店長、一歳の赤ちゃんがバカだなんて言うつもりじゃあないでしょうね!？」

「いやいや、奥さんにはこう言って渡したんだ、『まだ乳離れがお済みでないなら、お母さんのお乳から母乳を通して飲ませたほうが効き目がある』とね」

「それじゃあ、奥さんに＜薬＞を飲むように言ったんですか？」

「ああ、少し調合を変えた＜親バカにつける薬＞をね。ほどよく効いて、行き過ぎた思いも柔らかい母の愛になるよ」

『**medicine for fools**』